

高齢者がグループ活動に参加したきっかけは、「友人、仲間のすすめ」(男性37.0%、女性48.5%)、「個人の意思で」(男性33.9%、女性32.1%)、「自治会、町内会の呼びかけ」(男性28.5%、女性17.9%)の割合が高くなっている(図1-2-54)。

一方で、グループ活動に参加しなかった者も半数近くいるが、その理由としては「健康・体力に自信がないから」(男性32.9%、女性41.7%)、「家庭の事情(病院、家事等)があるから」(男性19.5%、女性23.9%)の割合が高く、「どのような活動が行われているか知らないから」、「気軽に参加できる活動が少ないから」、「同好の友人・仲間がいないから」もそれぞれ1割程度となっている(図1-2-55)。

なお、高齢者が参加する団体や組織としては、「町内会・自治会」(39.1%)、「趣味のサークル・団体」(22.0%)、「老人クラブ」(20.9%)などが多く、これに対し「ボランティア団体」(6.0%)、「シルバー人材センターなどの生産・就業組織」(1.9%)、「市民活動団体(NPO)」(1.7%)は少数にとどまっている(複数回答)。

ウ NPO活動に対する関心は高いが、きっかけや情報の不足で実際に参加している人は少ない

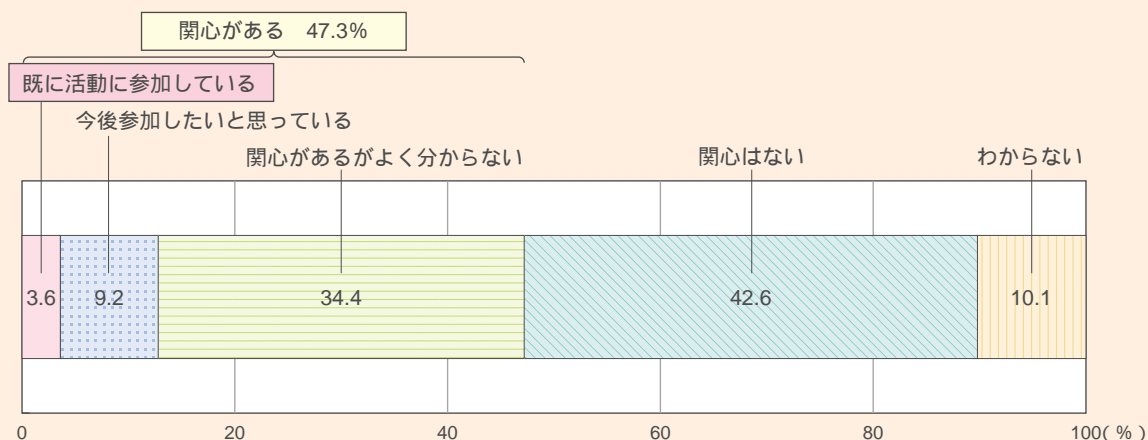
地域の福祉や環境を改善することを目的としたNPO(市民活動団体)活動に関心があるかについてみると、「既に活動に参加している」が3.6%、「今後参加したいと思っている」が9.2%、「関心があるがよく分からない」が34.4%となっており、これらを合わせた「関心がある」が47.3%となっている。一方、「関心はない」が42.6%となっている(図1-2-56)。

NPO活動に参加しなかった理由についてみると、「きっかけや機会がない」が最も多く、「NPO活動に関する情報がない」との回答も上位を占めている(図1-2-57)。

(2) 学習活動に参加している高齢者は2割程度

60歳以上の高齢者の学習活動への参加状況についてみると、何らかの学習活動に参加している者の割合は21.4%となっている。具体的な活動では、「カルチャーセンターなどの民間団体が行う学習活動」が10.6%、「公的機関が高齢者専

図1-2-56 NPO活動への参加の有無



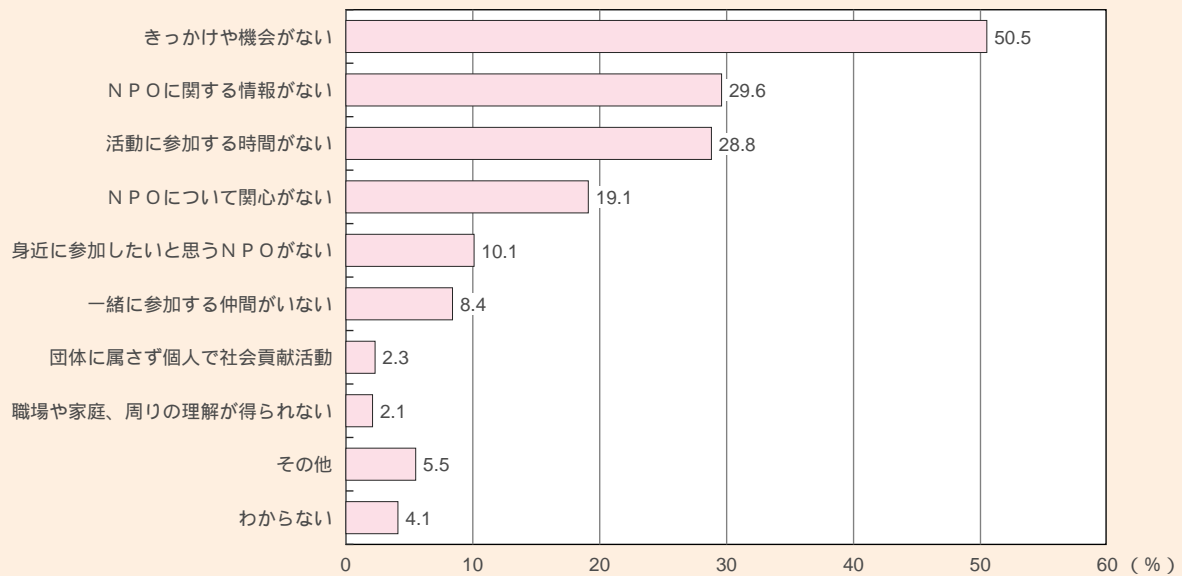
資料：内閣府「高齢者の地域社会への参加に関する意識調査」(平成16年)
(注) 全国60歳以上の男女を対象とした調査結果

用に設けている高齢者学級など」が5.5%などとなっている(図1-2-58)

また、学習活動に参加しなかった高齢者について、その理由をみると、「関心がない」

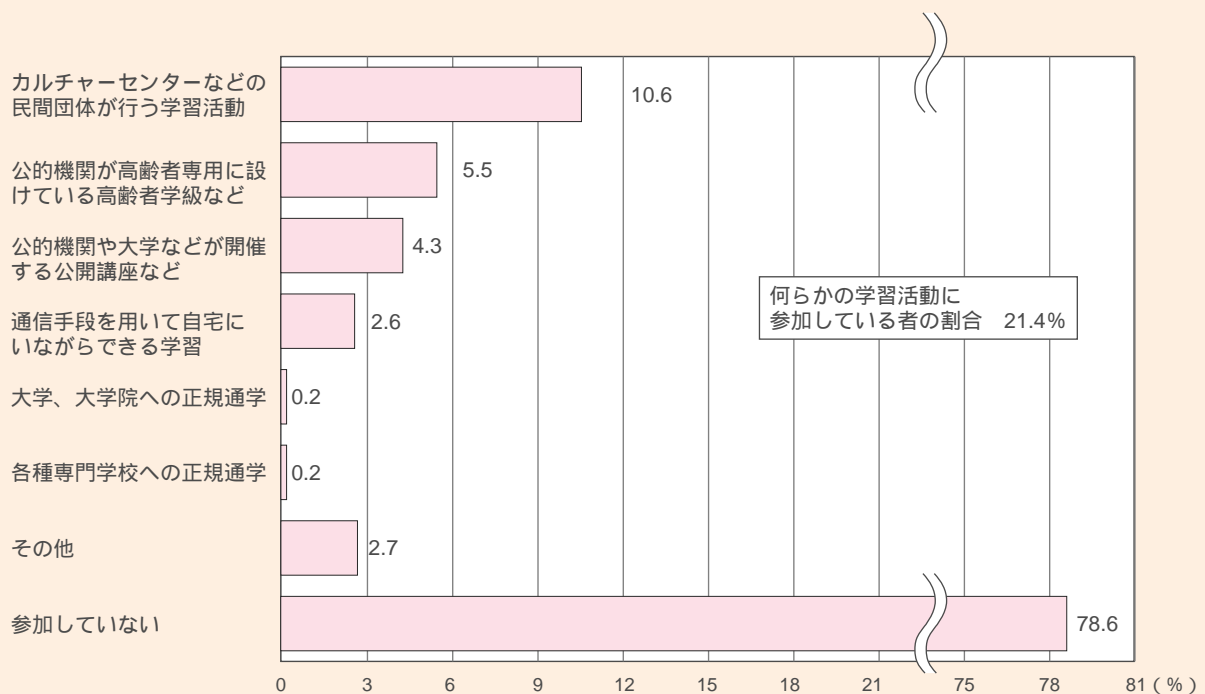
(男性28.9%、女性25.1%)、「健康上の理由、体力に自信がない」(男性19.4%、女性31.1%)、「時間的・精神的ゆとりがない」(男性23.8%、女性18.4%)、「他にやりたいことがある」(男性

図1-2-57 NPO活動に参加しなかった理由(複数回答)



資料：内閣府「NPO(民間非営利組織)に関する世論調査」(平成17年)

図1-2-58 高齢者の学習活動への参加状況(複数回答)



資料：内閣府「高齢者の生活と意識に関する国際比較調査」(平成18年)
 (注) 全国60歳以上の男女を対象とした調査結果

14.9%、女性8.4%)などが上位を占めているが、「やりたい活動が見つからない」(男性9.8%、女性10.7%)、「適当な場が見つからない」(男性6.7%、女性8.1%)など、学習活動に参加する動機やきっかけがないことを理由としている者も見受けられる(図1-2-59)。

6 高齢者の生活環境

(1) 高齢者は住宅と生活環境に概ね満足

ア 高齢者の多くは現在の住居に住み続けることを希望

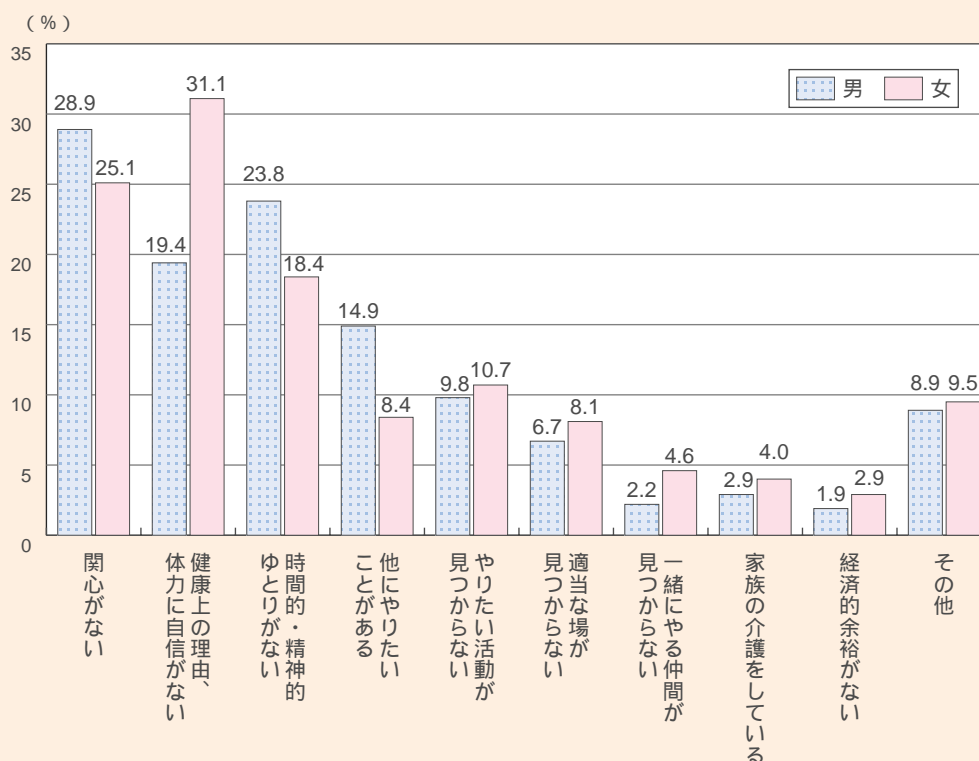
60歳以上の高齢者が、身体が虚弱化したときに望む居住形態についてみると、「現在の住宅にそのまま住み続けたい」が37.9%、「現在の住宅を改造し住みやすくする」が24.9%、「介護を受けられる公的な施設に入居する」が17.9%となっており、現在の住宅に住むことを希望してい

る者は、62.8%と半数以上を占めている(図1-2-60)。

イ 高齢者の半数以上は現在の住宅に満足

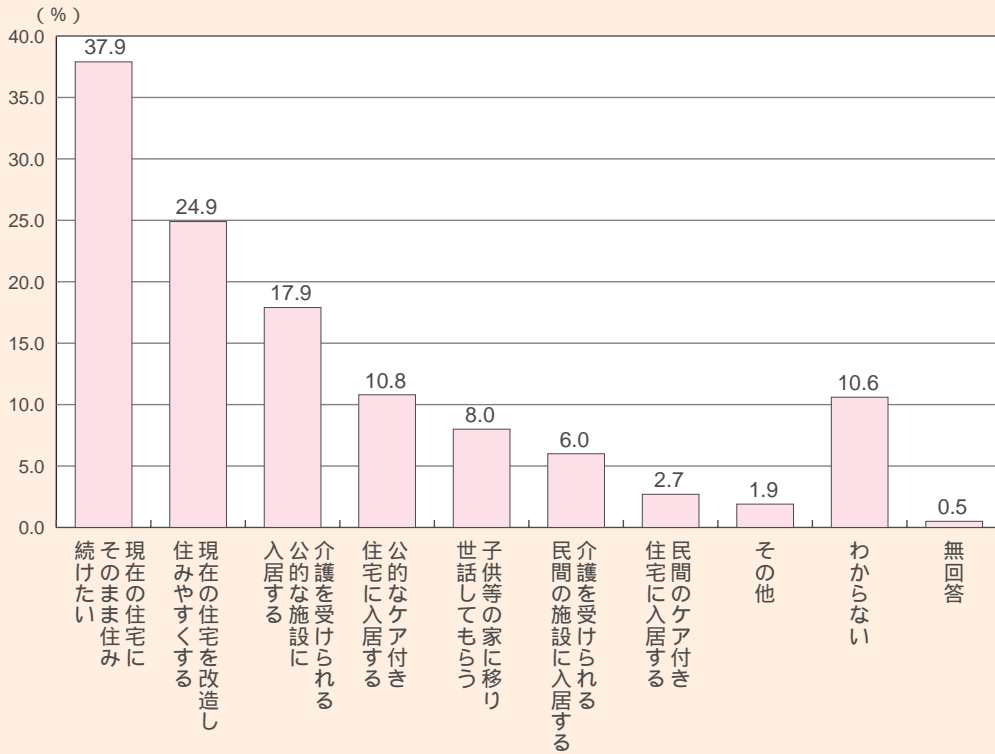
次に、60歳以上の高齢者が、現在住んでいる住宅で困っていることについて持ち家と借家の別でみると、「住まいが古くなりいたんでいる」(持ち家14.9%、借家23.0%)、「住宅の構造や造りが高齢者には使いにくい」(持ち家11.1%、借家8.5%)、「日当たりや風通しが悪い」(持ち家9.4%、借家12.7%)、「台所、便所、浴室などの設備が使いにくい」(持ち家7.5%、借家14.1%)などといった点があげられているものの、「何も問題点はない」が持ち家、借家ともに最も高い割合となっている(持ち家では58.0%、借家では43.7%)(図1-2-61)。

図1-2-59 学習活動に参加しなかった理由(複数回答)



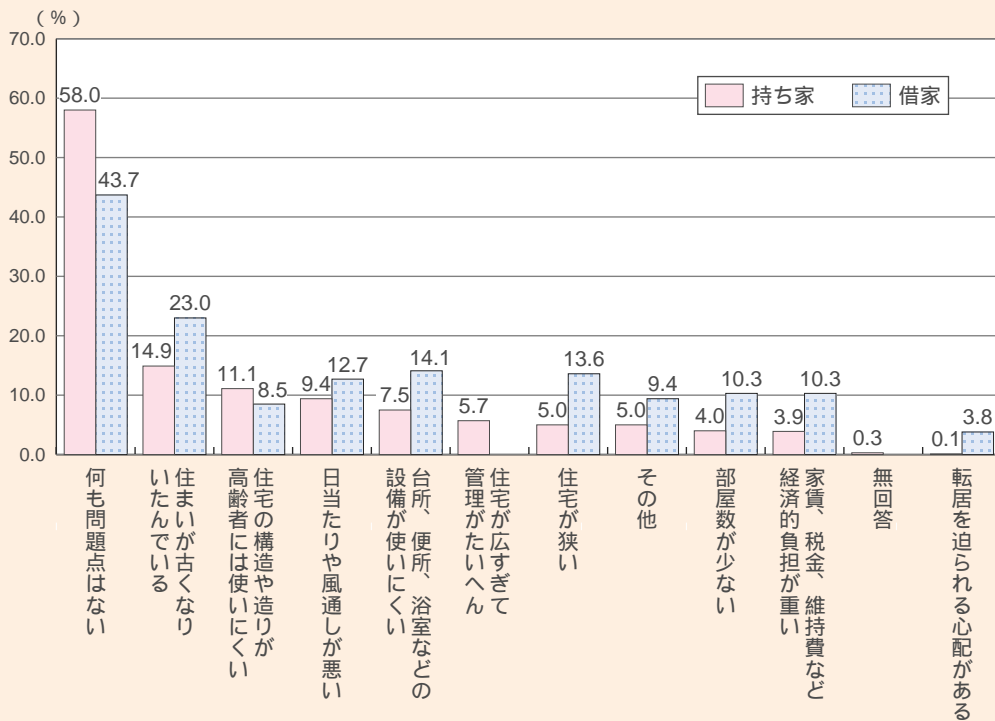
資料：内閣府「高齢者の生活と意識に関する国際比較調査」(平成18年)
 (注) 全国60歳以上の男女を対象とした調査結果

図 1 - 2 - 60 虚弱化したときに望む居住形態（複数回答）



資料：内閣府「高齢者の住宅と生活環境に関する意識調査」（平成18年）
 （注）調査対象は、全国60歳以上の男女

図 1 - 2 - 61 住宅で困っていること（複数回答）



資料：内閣府「高齢者の住宅と生活環境に関する意識調査」（平成18年）
 （注）調査対象は、全国60歳以上の男女

ウ 現在住んでいる地域で特に不便を感じない者が半数を占める

60歳以上の高齢者が現在住んでいる地域で不便に思ったり、気になったりすることについてみると、「日常の買い物に不便」が16.6%、「医院や病院への通院に不便」が10.0%、「交通事故にあいそうで心配」が9.2%、「交通機関が高齢者には使いにくい、又は整備されていない」が8.4%、「近隣道路が整備されていない」が7.8%などとなっているが、「特にない」が57.3%と半数以上を占めている（図1-2-62）。

(2) 高齢者の安全・安心

ア 外出する機会が増加する一方、交通事故も増加傾向

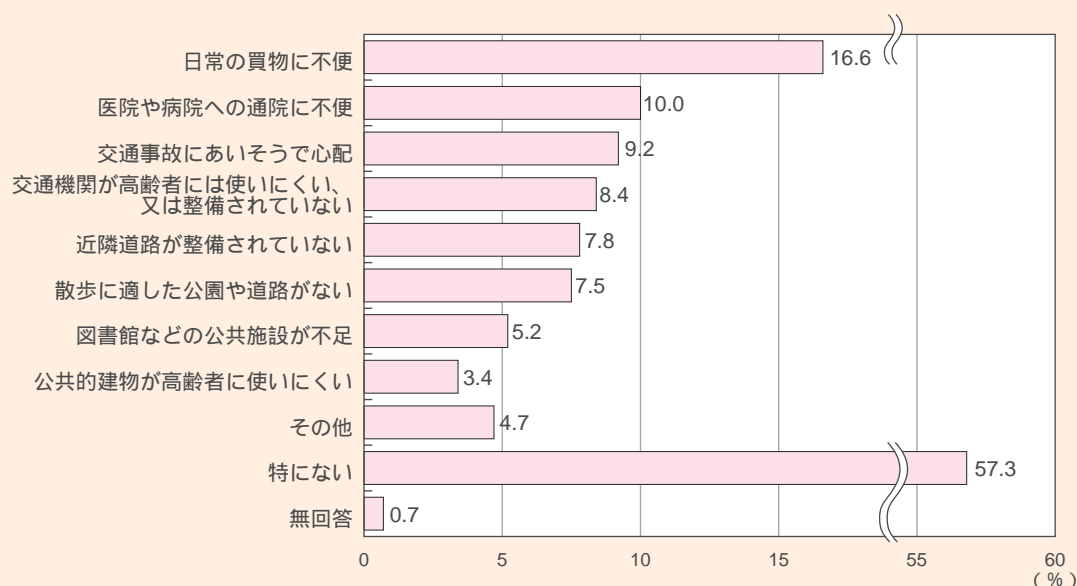
60歳以上の高齢者の外出状況についてみると、「ほとんど毎日外出する」が59.7%と6割近くを占め、「ときどき外出する」は32.9%、「ほとんど外出しない」は7.3%となっている。過去の調査と比較すると、「ほとんど毎日外出する」の割合が増加している（図1-2-63）。

65歳以上の高齢者の交通事故死者数をみると、平成18（2006）年は2,809人で14（2002）年より減少しつつあるが、交通事故死者数全体に占める割合は年々増加しつつあり、18（2006）年は44.2%となっている（図1-2-64）。

一方で、高齢運転者による交通事故件数についてみると、運転免許保有者の増加や高齢者が運転する機会が増加していることを背景として年々増え続けている。65歳以上の高齢運転者（原付以上）による交通事故件数は、平成17（2005）年は98,550件と、16（2004）年に比べ4.0%の増加となった（全年齢の計では1.9%の減少）。10年前の7（1995）年と比較すると、65歳以上の高齢者では24倍、75歳以上の後期高齢者では約3.5倍と、高い伸びを示している（図1-2-65）。

60歳以上の高齢者の外出に利用する手段についてみてみると、「徒歩」が57.7%と最も高く、次いで、「自分で運転する自動車」が38.9%、「自転車」が30.2%、「家族などの運転する自動車」が23.9%、「バス」が18.8%の順になっている。

図1-2-62 居住地域の不便な点（複数回答）



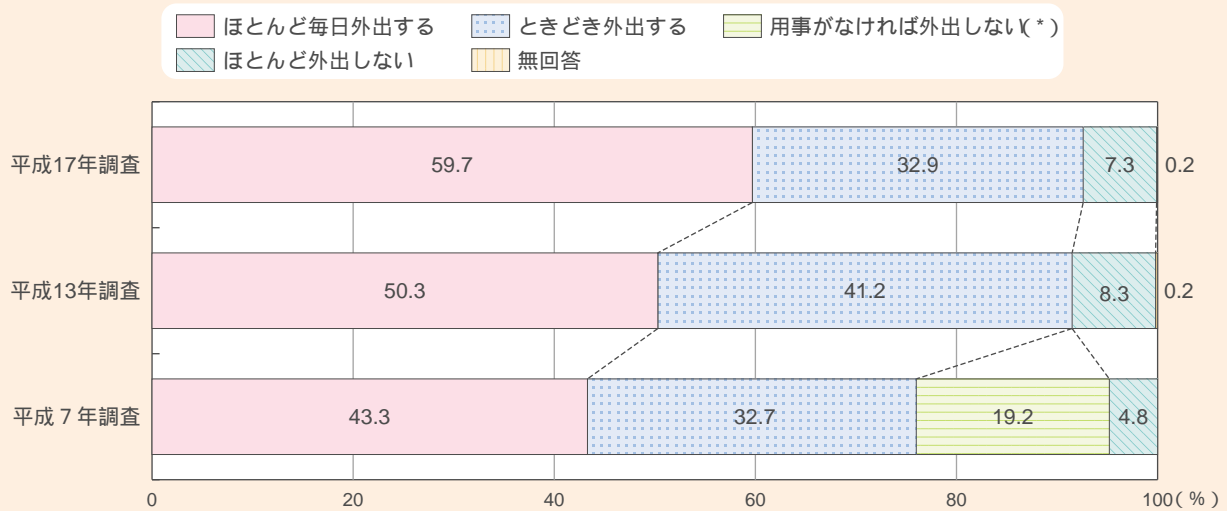
資料：内閣府「高齢者の住宅と生活環境に関する意識調査」（平成18年）
 （注）調査対象は、全国60歳以上の男女

過去の調査と比較すると、「自分で運転する自動車」の割合が増加傾向にあり、高齢運転者による交通事故件数の増加の一因となっていると考えられる(図1-2-66)

また、自分で自動車を運転する60歳以上の高

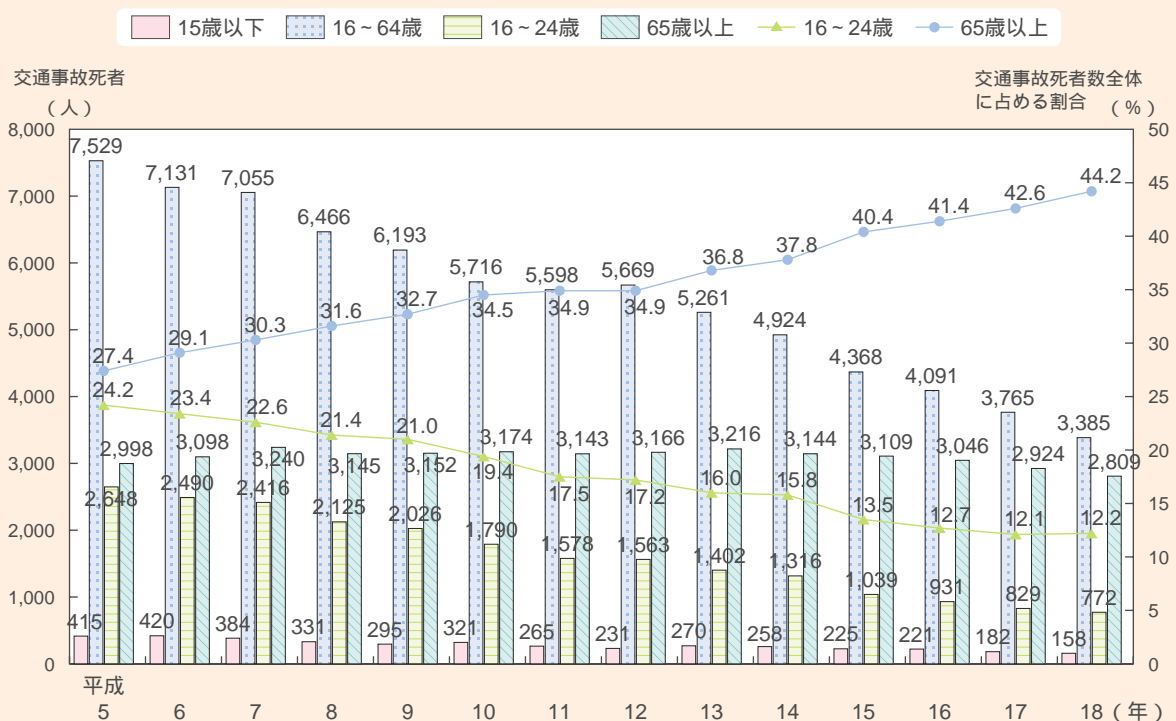
齢者(日常の外出手段として「自分で運転する自動車」を挙げた38.9%の者(複数回答))の運転頻度についてみると、「ほとんど毎日運転する」が64.1%と過半数を占め、「週2、3回は運転する」が25.5%となっており、約9割の者が

図1-2-63 高齢者の外出状況



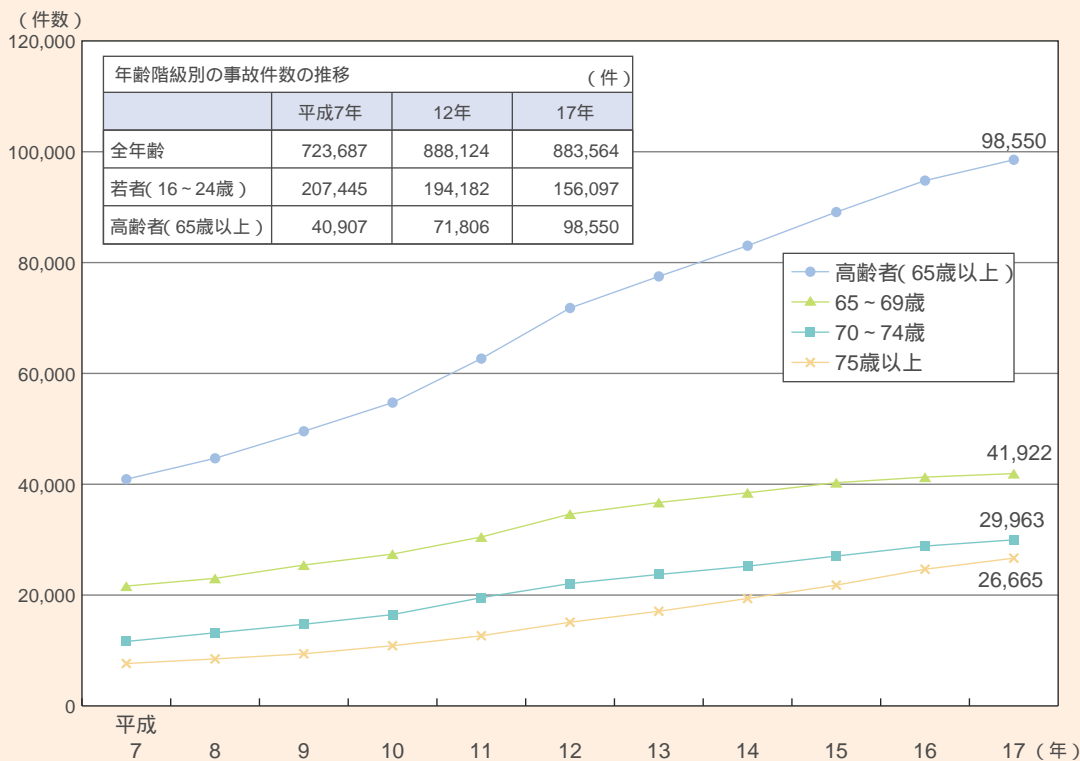
資料：内閣府「高齢者の住宅と生活環境に関する意識調査」(平成18年)より作成。
 (注) 1. 調査対象は、全国60歳以上の男女。
 2. 「用事がなければ外出しない」という選択肢は平成7年調査のみ。

図1-2-64 年齢層別交通事故死者数の推移



資料：警察庁「交通事故統計」

図1-2-65 高齢者による交通事故件数の推移（各年12月末）

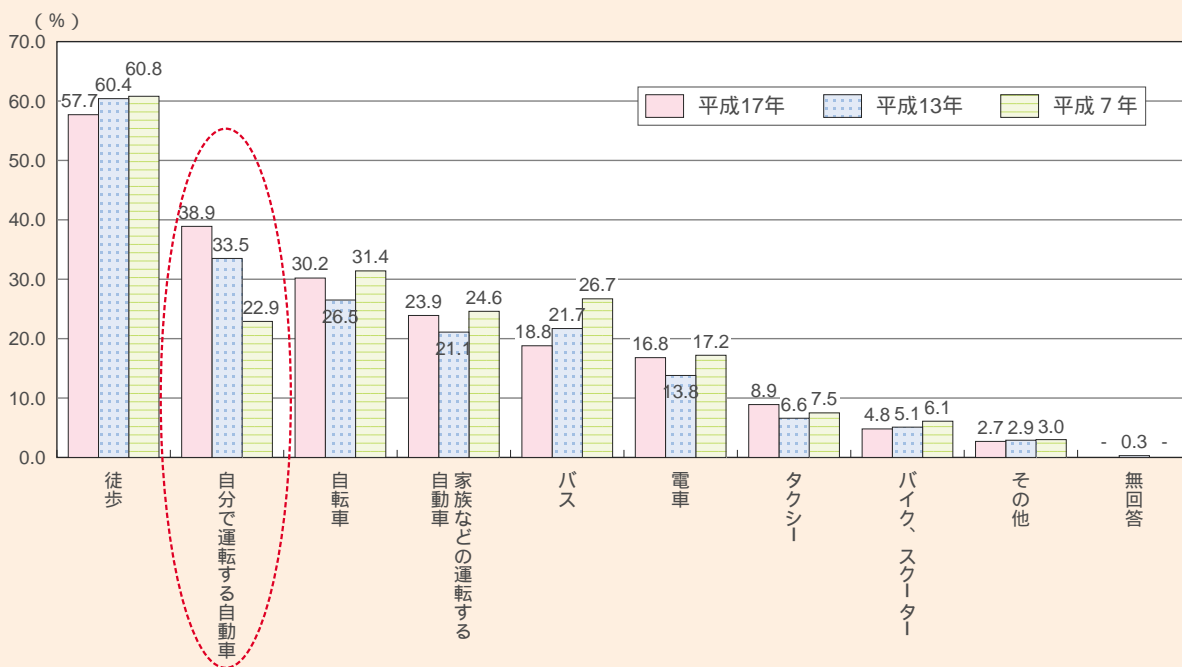


資料：警察庁「平成17年中の交通事故の発生状況」

(注1) 原付以上運転者(第一当事者)としての交通事故件数

(注2) 第一当事者とは、事故の当事者のうち、過失の最も重い者又は過失が同程度である場合にあっては人身の損傷程度が最も軽い者をいう。

図1-2-66 高齢者の外出手段（複数回答）



資料：内閣府「高齢者の住宅と生活環境に関する意識調査」(平成18年)

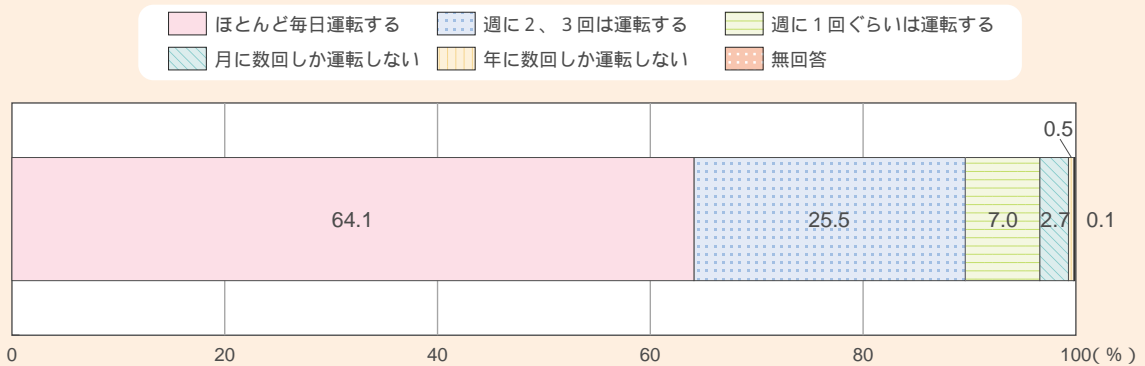
(注1) 調査対象は、全国60歳以上の男女

(注2) 図中の「その他」は、質問項目(「車いす」、「電動三輪車」、「その他」、「外出はしない」)の合計。

なお、「電動三輪車」・・・平成7年の調査ではなし

「外出はしない」・・・平成17年、平成13年の調査ではなし

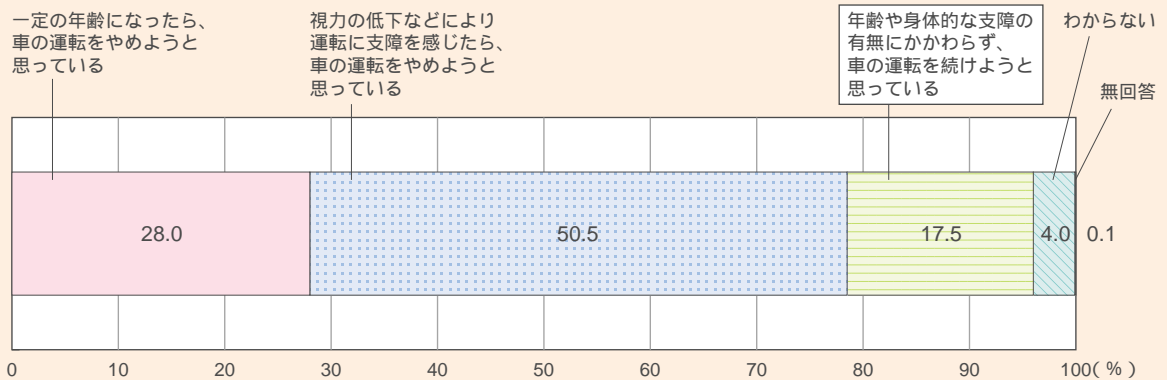
図 1 - 2 - 67 自分で自動車を運転する高齢者の運転頻度



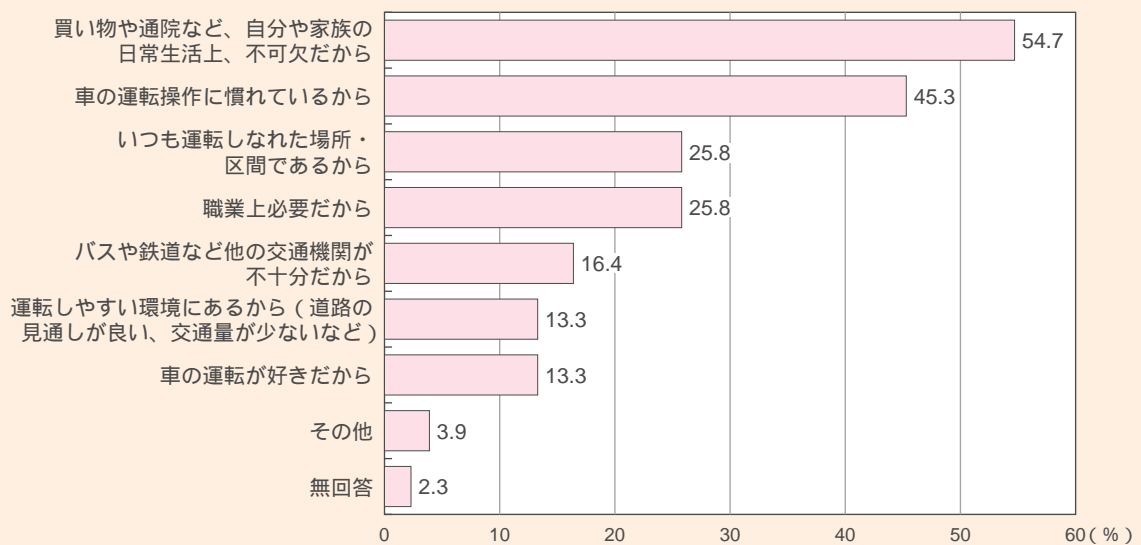
資料：内閣府「高齢者の住宅と生活環境に関する意識調査」(平成18年)
 (注) 調査対象は、全国60歳以上の男女。

図 1 - 2 - 68 今後の運転に関する意向

(1) いつまで車を運転し続けるか



(2) 年齢、支障にかかわらず車を運転し続ける理由は何か



資料：内閣府「高齢者の住宅と生活環境に関する意識調査」(平成18年)
 (注) 調査対象は、全国60歳以上の男女。

週2、3回以上運転している(図1-2-67)。

自分で自動車を運転する60歳以上の高齢者に、今後の運転に関する意向について聞いたところ、「視力の低下などにより運転に支障を感じたら、車の運転をやめようと思っている」が50.5%、「一定の年齢になったら、車の運転をやめようと思っている」が28.0%となっている一方で、「年齢や身体的な支障の有無にかかわらず、車の運転を続けようと思っている」が17.5%となっている(図1-2-68)。

2割弱の人が年齢や身体的な支障の有無にかかわらず、車の運転を続ける意向を持っていることになるが、その理由については、「買い物や通院など、自分や家族の日常生活上不可欠だから」が54.7%で最も高く、次いで「車の運転操作には慣れているから」が45.3%となっており、自動車が一部の高齢者にとっては生活していく上で必要不可欠なものとなっていることが

わかる。

イ オレオレ詐欺・恐喝の被害者の約半数が高齢者

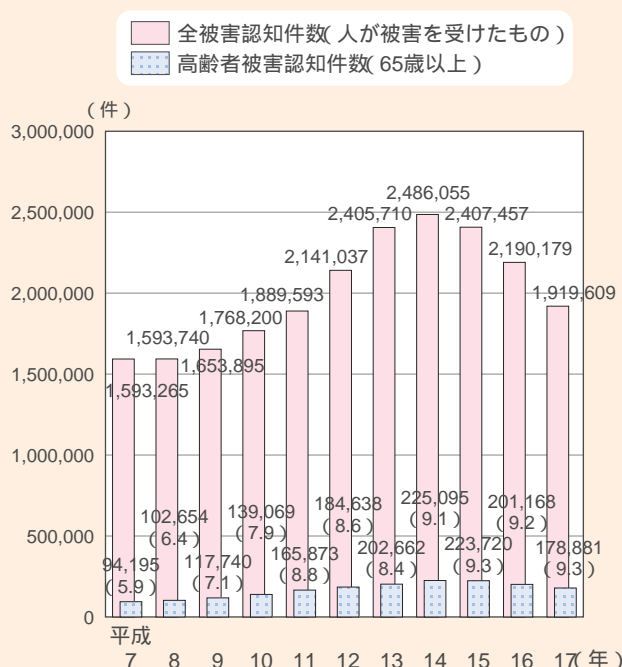
犯罪による65歳以上の高齢者の被害の状況について、刑法犯被害認知件数でみると、平成7(1995)年は9万4,195件であったが、17(2005)年には17万8,881件に増加しており、全被害認知件数の9.3%を占めている。

なお、振り込め詐欺・恐喝事件のうち、いわゆるオレオレ詐欺・恐喝事件の平成18(2006)年の認知件数は7,093件である。そのうち年齢が判明している被害者3,707人を分析したところ、65歳以上の割合は51.3%となっている。

また、65歳以上の高齢者の火災による死者数(放火自殺者を除く。)についてみると、平成17(2005)年は839人であり、全死者数の半分以上を占めている(図1-2-69)。

図1-2-69 犯罪、火災による高齢者の被害の推移

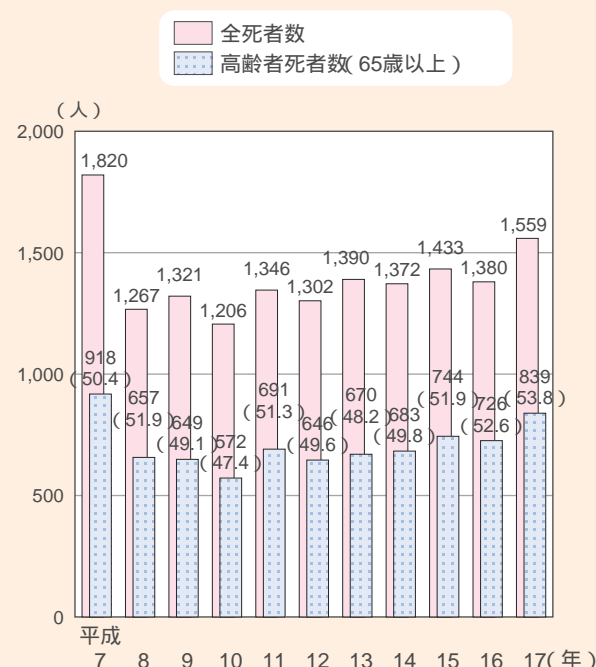
刑法犯被害認知件数



資料：警察庁「犯罪統計書」

(注) ()内の数字は、全被害認知件数(人が被害を受けたもの)に占める、高齢者被害認知件数(65歳以上)割合(%)

火災死者数(放火自殺者を除く)



資料：消防庁「消防白書」

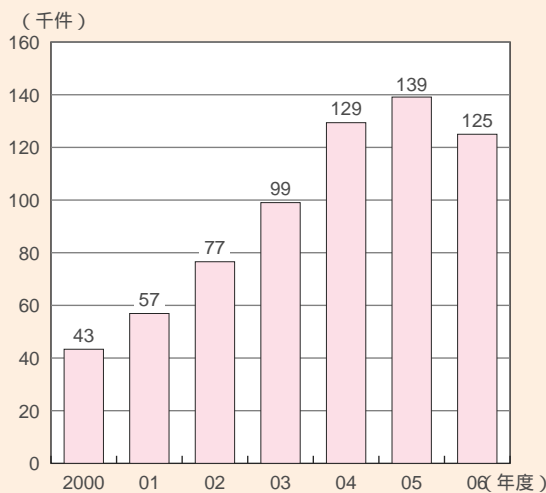
(注) ()内の数字は、全火災死者数(放火自殺者を除く)に占める割合(%)

ウ 消費トラブルの被害が年々増加している

全国の消費生活センターに寄せられた契約当事者が70歳以上の相談件数は、平成12(2000)年度は43,336件であったのが年々増加し、18(2006)年度は124,994件で、相談全体の12%を占めている。また、寄せられた相談について販売方法・手口をみると、家庭訪販が27.1%、次

いで電話勧誘が8.4%となっている。これは、高齢者が自宅に多いことが背景にあると考えられる(図1-2-70)。

図1-2-70 契約当事者が70歳以上の消費相談件数



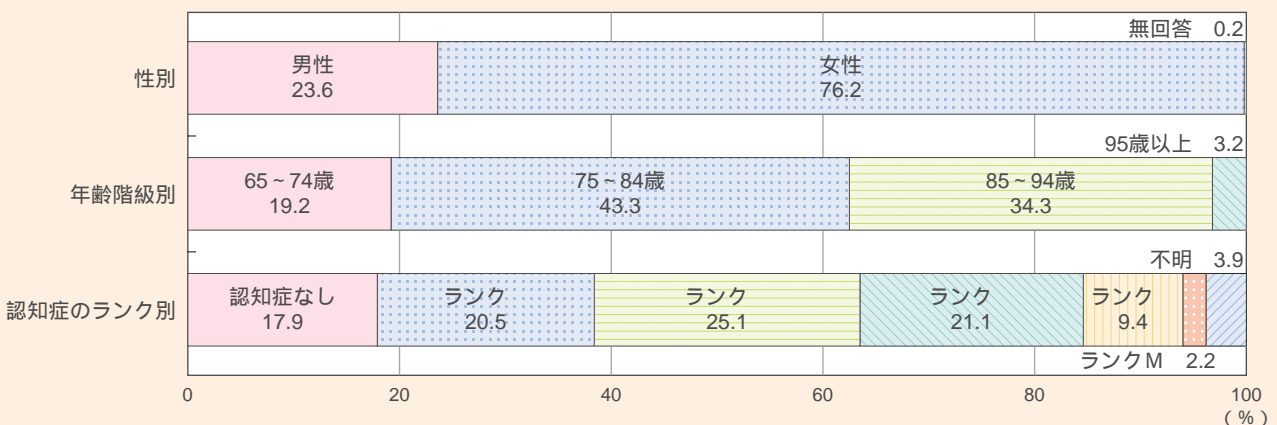
資料：国民生活センター資料

エ 家庭内で虐待を受けている高齢者の8割が「認知症あり」

家庭内で虐待を受けている高齢者(65歳以上)についてみると、性別では女性が8割近くを占め、年齢階級別では75歳以上の後期高齢者が8割を超えている。また、認知症のランク別では、介護等を必要とするランク 以上がおよそ3割で、より自立度の高いランク 及び を含めた「認知症あり」では8割近くを占めている(図1-2-71)。

なお、虐待の加害者は、「息子」が32.1%と最も多く、次いで、「息子の配偶者(嫁)」20.6%、「配偶者」20.3%(「夫」11.8%、「妻」8.5%)、「娘」16.3%となっている。

図1-2-71 虐待を受けている高齢者の属性



資料：(財)医療経済研究・社会保険福祉協会「家庭内における高齢者虐待に関する調査」(平成15年度)

(注) 認知症のランクは、「痴呆性老人(認知症高齢者)の日常生活自立度判定基準」による。

ランク：何らかの痴呆(認知症)を有するが、日常生活は家庭内及び社会的にほぼ自立している。

ランク：日常生活に支障を来すような症状・行動や意志疎通の困難さが多少見られても、誰かが注意していれば自立できる。

ランク：日常生活に支障を来すような症状・行動や意志疎通の困難さがときどき見られ、介護を必要とする。

ランク：日常生活に支障を来すような症状・行動や意志疎通の困難さが頻繁に見られ、常に介護を必要とする。

ランクM：著しい精神症状や問題行動あるいは重篤な身体疾患が見られ、専門医療を必要とする。